

キム
金

ソン
仙 美

学位の種類	博士（教育学）
学位記番号	教博 第 131 号
学位授与年月日	平成 23 年 12 月 21 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条 1 項該当
研究科・専攻	東北大学大学院教育学研究科（博士課程後期 3 年の課程） 総合教育科学専攻
学位論文題目	日本と韓国における外国人移動者の 二重価値規範に関する教育人類学的研究
論文審査委員	（主査） 准教授 李 仁 子 教授 笹 田 博 通 准教授 池 尾 恭 一

〈論文内容の要旨〉

本論文は、日本と韓国における外国人母親とその子どもを調査し、異文化への移動によって生じる文化適応や二重価値規範の問題を考察することによって、外国人母親の教育価値観の変容や、その子どもたちのアイデンティティ形成に見られる特徴を明らかにしたものである。

国際移動をした人々は一般に、異文化に適応する過程で、さまざまな環境的要因や経済的要因、社会的要因や文化的要因によって影響を受け、その結果、二重の価値規範を抱え込むことになる。本論文の目的は、まず、そうした二重価値規範を抱え込んだ外国人女性、中でも母親に着目し、彼女らが生きていく上で、また子どもを育てていく上で、価値規範の「選択」と「排除」を状況に応じて行っていく様相を検討することにある。さらに、その選択と排除の過程でみられる外国人母親の「異文化における教育価値観」の形成プロセスを考察する。また、外国人母親に育てられる子どもにも着目する。そうした子どもたちは母親同様に二重価値規範を内面化するが、母親とは異なった形で規範の「選択」と「排除」を行い、自らのアイデンティティを形成していく。そうした子どもたちの二重価値規範への対応とアイデンティティ形成の諸相を明らかにすることも本研究の目的である。

本論文の内容は次のようにまとめられる。

まず、序論と第1章では論文の目的を述べ、異文化適応や価値規範、国際移動と教育などに関する先行研究を検討した上で、先行研究に基づき、異文化接触と二重価値規範に関する基本的な分析モデルを提示した。

第2章では、日本と韓国における多文化社会と多文化教育の現況について検討した。まず、外国人の子どもの教育に対する日本の政策は、ニューカマーの子どもたちの急増にもかかわらず顕著に変化したとは言えない。しかし、外国人と共に日本社会を生きるという「多文化共生」意識は学校教育においても「国際理解教育」「多文化教育」というスローガンの下で、実践的な方策を模索している。一方、1990年代から急激に多文化主義や多文化状況が広まった韓国の多文化教育は、具体的な政策を伴って推進されてきている。

第3章と第4章では、調査結果に基づいて、移動の社会的背景やアイデンティティのありようを明らかにした。外国人女性が異文化へ移動するのは、先行研究が示すように、経済的な理由によるところが大きい。と同時に、今日では、保守的で重層的な家族関連規範が社会的通念により守られながらも、核家族化が急速に進行し、ジェンダー役割も急激に変化してきており、そうした変化を背景にした「女性ならではの選択」の結果、国際移動が増加している。移動した時点ですでに価値規範にゆらぎが生じ、選択の余地が生まれているのである。

一方、外国人の子どもたちには、学校での差別やいじめの経験から、国や民族に関する価値規範にセンシティブで、どこにも安定して所属していない「一時滞在」のアイデンティティがみられる。反対に、家庭などで積極的な母文化との接触があったり、母文化社会と異文化社会とが友好関係にある場合には、自分の中にある二つの異なる民族性をポジティブに見つめる「二重価値規範の共存」が内面化されるケースや、二重価値規範のなかで「異文化と母文化を分けて行動基準を選択する」という「二重価値規範のアイデンティティ」がみられた。

第5章では、各章の調査内容を踏まえ、国際移動をめぐる外国人の意識変容と二重価値規範のありようについて、本論文で設定した目的を中心に考察した。まず、二重価値規範に対する外国人女性による「選択」と「排除」のあり方として、異文化を生きぬくための戦略としての「選択」や、ホスト社会による承認や社会的位置の確認のための「選択」がみられる。また、二重価値規範に対する葛藤は、異文化の価値規範の習得を促進する役割を果たすとともに、ホスト集団との調和を求める意識が生成される。さらに、異文化での経験や社会的承認などにより異文化における社会的アイデンティティが形成される中で、子どもの教育に関する教育価値観にも変化がみられ、ホスト集団との調和を目指す教育価値観が女性たちの中で形成される。

一方、外国人の子どもたちの「二重価値規範の共存の内面化」や「二重価値規範のアイデンティティ」は、異なる二つの社会や文化を複眼で捉えている。そのため、個々の状況をそれぞれの文脈で把握し、その状況ごとに望ましい行動規範を選択する。異文化において常にどちらかの価値

規範を「選択」し、どちらかは「排除」せざるを得ないといった考えをくつがえす、創造的なアイデンティティであると言えよう。

第6章では、各章の要約と序論で提起した問題について総合的に論じた上で、今後の課題について述べた。今後の課題としては、まず、今後長期滞在者の増加が予想される中、調査対象の継続的な追跡調査を行う必要があるが、その際とくに親と子の調査を同時に行うことに努め、親と子の相関関係という観点から二重価値規範の様相に接近する調査と考察が必要である。さらに、日韓における本格的な比較研究を通じた両国の文化の違いという側面からの調査と考察が必要である。

〈論文審査の結果の要旨〉

グローバル時代におけるトランスナショナルな現象に関する研究は、移住、移民、異文化、多文化、外国人などをキーワードに、適応の問題、アイデンティティの問題、社会的不平等・差別の問題、教育の問題等々、多様な角度から行われてきている。その多くは、特定の問題に焦点を当て、その問題を解決するための方法を探ることに注力しており、いきおい、少し前なら同化か分離かという二元論的政策議論に、そして昨今では多文化政策もしくは統合政策をめぐる議論に回収されやすい。しかし、今日の人口移動は非常に複雑かつ多様化してきており、ひと頃のようにエスニック単位で考察しきれるものではない。さらに、移動する側のみならず、受け入れる側のホスト社会そのものも流動化している。そのため、外国人の子弟教育一つをとっても、その実像を浮き彫りにするためには、マクロな視点からの分析ばかりでなく、よりミクロなレベルでの調査研究が要請される。

本研究は、まさしくそうした要請に応えるものである。集団単位での分析と並行して個にも焦点を当て、国際移動をした女性たちやその子どもたちの個別調査を行っている。そうしたミクロなレベルにおける調査によって、女性たちがナショナルアイデンティティや文化的アイデンティティを巧みに取捨選択していること、そうでありながらも、ホスト集団との交渉を重ねるうちに、子どもの教育に関する価値観を変化させていき、母親である彼女らの中に、ホスト文化に親和的な教育価値観が形成されていくことを明らかにした。こうした成果は、教育人類学的なアプローチによる人間形成論研究の新たな可能性を提示したものと言える。

さらに、外国人の母親を持つ子どもたちに対する調査からは、子どもたちのアイデンティティが、異文化社会における葛藤や抑圧によって必ずしも「負」の性質を帯びるわけではないことを明らかにした。むしろ、場合によっては、国際移動に伴う経験が子どもたちのアイデンティティ

に創造的で柔軟な性質を帯びさせ、今後の国際化時代を引っ張っていくハイブリッドな能力を高めやすくする可能性を提示した本研究は、これまでの人間形成論研究には見られない独創性を有している。

本研究では、また、国際移動をした人々の二重価値規範に対する「選択」と「排除」に関して、日本と韓国をフィールドとした比較調査研究を行っている。従来の研究でも調査蓄積の薄い部分であり、それを補完したという意味において、教育学をはじめ隣接諸科学に対して多大な貢献をなすものである。すでにこの点に関しては、韓国の国際理解教育学会などにおいて高い評価を得ている。

しかし、課題も残されている。異文化におけるアイデンティティを論じるからには、異文化や自文化の総体をホリスティックに捉える視点が不可欠である。本論文は、価値規範や価値観に主眼を置く余り、そうした視点が不足している。ただ、この点は今後の課題として自覚されている。こうした問題点があるとはいえ、国際移動やそれに伴う教育に関する膨大な関連文献を広く探査・読解し、日本と韓国において数多くの個別調査を継続して行い、国際移動した女性や子どもの価値規範や教育をめぐる諸特徴を多角的・重層的に解明した本論文は、全体としてみるならばきわめて意欲的な研究であるといえる。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として合格と認める。